

1992年

ポストコレクション

週刊ポスト1992年7月号

《魚達の所作 (13)》 望月洋史

瀬木慎一 (美術批評家)

画家の理想はそれぞれ異なるだろうが、そのひとつは、「自然のままに描く」ことにある。それは目指しても容易に実現できない業であり、多くの場合、反対の方向へ行ってしまう。

この未知の若い画家の個展を訪れて、ほとんど単色と言っていい墨によるドローイングの大作群を見て、丁度いい具合に出来上がっているなあ、という感想を抱いた。

ふつうの画家だったら、この種のものはスケッチ・ブックに描き、それで終わる。スケッチのいい画家はたくさんいる。ところがこの画家は、このような大画面に描いて、無心である良さを失わない。

それらの一見気ままな線描をじっと眺めていると、一コマ一コマに鮮やかな表情があって、思いがけない諷諭すら浮かんで来る。意図せずにそうなっているところが快い。

